帝京大学　心理学紀要
2006, No.10, 1 − 9

嘘とアイロニーの行動分析学的一考察[註1)]

佐藤方哉

A behavior analysis of lie and irony

SATO, Masaya

Abstract

From the standpoint of behavior analysis, the present author defined lie and irony as distorted tact, and analyzed the behavioral contingencies of these kinds of distorted tact. The analysis disclosed the following: Lie or irony as a distorted tact is controlled by two contingencies; main contingency and additional contingency. Additional contingency is activated by a certain establishing operation. If a student was absent form the class by hangover, and tells to the professor “My mother was sick, and I had to take care of her.”, the main contingency controlled covert “I suffered from hangover.” and the additional contingency controlled overt “My mother was sick, and I had to take care of her.”. Overt “My mother was sick, and I had to take care of her.” is an intraverbal controlled by covert “I suffered from hangover.”. “My mother was sick, and I had to take care of her.” is an autclitic controlled by the additional contingencies. In this case, an establishing operation to avoid punishment activated the additional contingency. If a drunken husband comes back home in the midnight, and his wife shouts to him “You came back very early!”, the main contingency controlled covert “you came back very late.” and the additional contingency controlled overt “You came back very early!”. Overt “You came back very early!” is an intraverval controlled by covert “you came back very late.”, and “You came back very early!” is an autclitic controlled by the additional contingency. In this case, an establishing operation to punish the husband activated the additional contingency. Although both lie and irony are distorted tact, there is an important difference: If the listener notices that an utterance is a lie, the lie is ineffective, and if the listener does not notice that an utterance is an irony, the irony is ineffective.

0

本稿は、嘘とアイロニーについて、行動分析学的に分析し、その類似点と相違点を明らかにしようとする試みである。

嘘およびアイロニーとは何であろうか。国語辞典では「嘘」は次のように定義されている[註2)]。

例1：真実でないこと。（広辞苑　第5版）

例2：事実でないこと。（旺文社国語辞典　第九版）

例3：事実でないこと（話し手が事実でないと意識している場合に用いる）。（新潮現代国語辞典　第二版）

例4：本当でないこと。（ハイブリッド新辞林）

例5：どんな点から見ても、事実であるとは思えないこと。（新明解国語辞典　第五版）

一方、英語の“lie”は次のように定義されている。

例1：an untrue deceptive statement deliberately used to mislead.（Collins Dictionary of the English Language）

例2：an untrue statement purposely made to deceive.（Longman Dictionary of Contemporary English-New Ed.）

例3：a statement that the speaker knows to be untrue.（Oxford American English Dictionary.）

例4：a false statement or piece of information deliberately presented as being true: a falsehood.（The American Heritage Dictionary of the English Language-New College Ed.）

例5：an intentionally false statement.（The Concise Oxford Dictionary-New Ed.）

例6：a false statement made with deliberate intent to deceive: a falsehood.（The Random House College Dictionary-Rev. Ed.）

国語辞典では「アイロニー」は次のように定義されている。

例1：皮肉。あてこすり。反語。（広辞苑　第5版）。

例2：冷笑・非難する目的で、言葉のもつ意味とは反対の内容を裏面に含ませて言い表すこと。たとえば､あきれるほどひどい状態を「ごりっぱですね」などと言う類。反語。皮肉。あてこすり。風刺。イロニー。（旺文社国語辞典　第九版）

例3：反語。逆説。（新潮現代国語辞典　第二版）

例4：皮肉。あてこすり。また，皮肉を含んだ表現。風刺。（ハイブリッド新辞林）

例5:〔文芸用語で〕反語。表現技法として用いる、事実に反する言い方。〔狭義では、皮肉・あてこすりなどを指す〕。(新明解国語辞典　第五版)

一方、英語の“irony”は次のように定義されている。

例1：the humorous or mildly sarcastic use of words to imply the opposite of what they normally mean.（Collins Dictionary of the English Language）

例2：use of words which are clearly opposite to one’s meaning, usu. either in order to be amusing or to show annoyance.（Longman Dictionary of Contemporary English-New Ed.）

例3：the expression of one’s meaning by using words of opposite meaning in order to make one’s remarks forceful as that will please him（used of something that will not please him）.（Oxford American English Dictionary.）

例4：the use of words to convey the opposite of their literal meaning.（The American Heritage Dictionary of the English Language-New College Ed.）

例5：an expression of meaning, often humorous or sarcastic, by the use of language of a different or opposite tendency.（The Concise Oxford Dictionary-New Ed.）

例6：a figure of speech in which the words express a meaning that is often the direct opposite of the intended meaning.（The Random House College Dictionary-Rev. Ed.）

これらを参考に、嘘およびアイロニーを次のように定義してみよう。

嘘とは、事実と思っていることに反することを言う言語行動である。

アイロニーとは、事実と思っていることと反対のことを皮肉をこめて言う言語行動である。

1

ここでは、嘘とアイロニーを言語行動としているが、まだ行動分析学的な分析に充分たえうる定義とはいえない。そこで、これらを次のようにより行動分析学的に翻訳することにしよう。

嘘とは、事実に反することを事実のごとく述べた歪曲タクトである。

アイロニーとは、皮肉あるいは風刺をこめて事実とは反対のことを述べる歪曲タクトである。

Skinner（1957）にはじまる行動分析学的な言語行動論では、タクトは、次のように二通りに定義できる。

1. タクトとは、環境における事物あるいは出来事に制御され、聞き手によりもたらされる般性好子により強化される言語オペラントである。
2. タクトとは、弁別刺激としての特定の事物あるいは出来事が主要な制御変数である言語オペラントである

歪曲タクトは、次のように定義できる。

歪曲タクトとは、タクトをよそおっているが、般性好子によってではなく、特定の好子の出現または消失阻止あるいは特定の嫌子の消失または出現阻止によって強化される言語オペラントである。

言い換えれば、歪曲タクトとはタクトをよそおったマンドである。マンドは、次のように二通りに定義できる。

1. マンドとは、聞き手によってもたらされる、特定の好子の出現または消失阻止あるいは特定の嫌子の消失または出現阻止によって強化される言語オペラントである。
2. マンドとは、特定の好子あるいは嫌子の確立操作が主要な制御変数である言語オペラントである。

このように分析してくると、歪曲タクトとは、弁別刺激としての特定の事物あるいは出来事と特定の好子あるいは嫌子の確立操作という二つの主要な制御変数によって制御される言語オペラントであることが明らかになる。ここで、嘘とアイロニーに分析にとってより有効と思われる、歪曲タクトについての次のように定義が導かれる。

嘘およびアイロニーという歪曲タクトとは、主要随伴性による刺激性制御が、何らかの確立操作により生じた付加随伴性ゆえに歪曲したタクトである。

主要随伴性とは、通常のタクトを制御している行動随伴性である。ところが、嘘あるいはアイロニーが自発される際には、この主要随伴性以外に何らかの確立操作によりもう一つの随伴性が出現する。それが付加的随伴性である。

嘘についての一例をあげて分析してみよう。ある学生が、教授になぜ先週のゼミに欠席した

のかと問われて、二日酔いでさぼったのだが、「母が急病で病院に付き添って行きました」といったとしよう。

ここでの主要随伴性と付加随伴性は以下の通りである。

主要随伴性＝S^D［二日酔い］:「二日酔いでした」→RFT
付加随伴性＝［確立操作］:「母が急病で病院に付き添って行きました」→RFT

すなわち、主要随伴性だけで付加的随伴性が存在しないならば、「二日酔いでした」という通常のタクトが自発されて強化されるわけであるが、この場合は通常のタクトは教授の叱責という嫌子を出現させることが予測される状況なので、叱責という嫌子の確立操作により付加的随伴性が発現し、「母が急病で病院に付き添って行きました」という嘘を自発し、嫌子回避により強化される。「母が急病で病院に付き添って行きました」という歪曲タクトは、主要随伴性が制御するカヴァートな「二日酔いでした」を弁別刺激とするイントラバーバルであると同時に、付加的随伴性に制御されたオートクリティックである。

次に、アイロニーについての一例についても分析してみよう。夜中に泥酔して帰宅した夫に、妻が「お早いお帰りね」と叫んだとしよう。

ここでの主要随伴性と付加随伴性は次の通りである。

主要随伴性＝S^D［夫が深夜に帰宅］:S^D（夫が深夜に帰宅）:「遅いわね」→RFT
付加随伴性＝［確立操作］:「お早いお帰りね」→RFT

すなわち、主要随伴性だけで付加的随伴性が存在しないならば、「遅いわね」という通常のタクトが自発されて強化されるわけであるが、この状況では妻にとって夫がネガティヴな情動を喚起するという好子の確立操作により付加的随伴性が発現し、「お早いお帰りね」というアイロニーを自発し、聞き手にネガティヴな情動を喚起させるという好子の出現により強化される。「お早いお帰りね」という歪曲タクトは、主要随伴性が制御するカヴァートな「遅いわね」を弁別刺激とするイントラバーバルであると同時に、付加的随伴性に制御されたオートクリティックである。

ここまでの分析から明らかになったように、歪曲タクトとしての嘘あるいはアイロニーが自発されるのは、主要随伴性が制御する通常のタクトよりも大きな強化がもたらされる場合である。

それでは、嘘あるいはアイロニーはどのように強化されるのであろうか。

嘘には、大別して次のような3種類の強化があるように思われる。

1. 好子（正の強化子）出現、嫌子（負の強化子）消失、嫌子出現阻止、および好子消失

阻止による強化.

2. 聞き手に情動を喚起させることによる強化.

3. 聞き手の認知を変化させることによる強化.

1の例として、好子出現による強化としては、「お金を掏られてしまった」と嘘をついて聞き手からお金をもらうような場合、嫌子出現の阻止による強化としては、上述の例のように、二日酔いでサボったに「母が急病で病院に付き添って行きました」と嘘をついて聞き手から非難されるのを避けるような場合がある。

2の聞き手に情動を喚起させることによる強化には、

1. 言語的に好子を提示することによりポジティヴな情動を生じさせる（わくわくさせる).
2. 言語的に嫌子を除去することによりポジティヴな情動を生じさせる（ほっとさせる).
3. 言語的に嫌子を提示することによりネガティヴな情動を生じさせる（はらはらさせる).
4. 言語的に好子を除去することによりネガティヴな情動を生じさせる（がっかりさせる).

の4ケイスがある。例として、ほっとさせることによる強化としては、胃癌の聞き手に「軽い胃潰瘍ですよ」というような場合、はらはらさせることによる強化としては、Cをつけるつもりの学生に対し「君はまずDだね」というような場合がある。

3の聞き手の考えを変化させることによる強化の主なものとして、聞き手に話し手あるいは第三者の評価を変化させることによる強化が考えられる。これには、

1. 言語的に自分をポジティヴに評価するようにさせる.
2. 言語的に自分をネガティヴに評価しないようにさせる.
3. 言語的に第三者をポジティヴに評価するようにさせる.
4. 言語的に第三者をネガティヴに評価しないようにさせる.
5. 言語的に第三者をネガティヴに評価するようにさせる.
6. 言語的に第三者をポジティヴに評価しないようにさせる.

の6ケイスがある。ライバルのありもしないよくないゴシップを流すのは、言語的に第三者をネガティヴに評価するようにさせる、あるいは言語的に第三者をポジティヴに評価しないようにさせる例といえよう。

アイロニーには次の3種類が区別される。

1. 聞き手自身あるいは聞き手のおかれた状況についてのアイロニー.
2. 話し手および聞き手以外の第三者自身あるいは第三者のおかれた状況についてのアイロニー.
3. 話し手または話し手とその仲間自身あるいは話し手または話し手とその仲間のおかれた状況についてのアイロニー.

そして、それぞれにおける強化は次の通りである。

1. 聞き手におけるネガティヴな情動の喚起.
2. 聞き手におけるポジティヴな情動の喚起.
3. 聞き手におけるポジティヴな情動の喚起.

1の例としては、上述の、夜中に泥酔して帰宅した夫に、妻が「お早いお帰りね」と叫んだというものである。

2の例としては、I教授の講演を聴いていたS教授は、I教授が好子（正の強化子）消失による弱化（罰）と消去とを混同していることを知って、隣のM教授に「I先生は偉大な行動分析学者だねー」と囁いた、といったものがあろう。ここでの主要随伴性と付加随伴性は、

主要随伴性 = S^D［I教授の講演］:「Iは馬鹿者」→RFT

付加随伴性 =［確立操作］:「I先生は偉大な行動分析学者だねー」→RFT

である。

3の例としては、ピクニックに行く予定の日の朝、大嵐になり、夫は妻に「素晴らしいピクニック日和だ」と叫んだ、というものがあろう。ここでの主要随伴性と付加随伴性は、

主要随伴性 = S^D［大雨］:「大雨だ」→RFT

付加随伴性 =［確立操作］:「素晴しいピクニック日和だ」→RFT

である。

2

嘘とアイロニーの類似点と相違点は何であろうか。いずれも歪曲タクトである点を除いて類似点は乏しいように思われる。

嘘とアイロニーの相違点と思われるものを表1に示す。

表1　嘘とアイロニーの相違点

	嘘	アイロニー
有効条件	聞き手は嘘だと気づかない	聞き手はアイロニーだと気づく
強化	種々	聞き手の情動喚起
理解と発話の発達	早い	遅い

第一の相違点は、嘘は強化されるためには聞き手に歪曲タクト（嘘）であることを悟られてはならないのに対し、アイロニーは強化されるためには聞き手に歪曲タクト（アイロニー）であることが通じなければならない点である。

第二の相違点は、嘘の強化には、好子出現、嫌子消失、嫌子出現阻止、好子消失阻止によるもの、聞き手の情動喚起によるもの、聞き手の認知変容によるものなど様々ものがあるのに対

し、アイロニーの強化は、聞き手の情動喚起によるもののみである点である。

第三の相違点は、嘘の理解および自発に比べ、アイロニーの理解と自発は発達的に遅い点である。

∞

嘘およびアイロニーについての従来の分析の多くはメンタリスティックなものである（e.g. Sperber and Wilson (1981), Clark and Gerrig (1984), Kreuz and Glucksberg (1989), 橋元 (1989), 田中 (1995)）。そして、それらの源にはGrice (1975) の会話の公準がある。会話の公準とは、

Ⅰ　量に関して：
　(a) 必要な情報をできるだけ多く提供せよ.
　(b) 不必要な情報を提供するな.
Ⅱ　質に関して：
　(a) 偽と信じていることを言うな.
　(b) 証拠の不十分なことを言うな.
Ⅲ　関係：
　関連のあることのみ言え.
Ⅳ　様態：
　(a) 不明確な表現を避けよ.
　(b) 曖昧さを避けよ.
　(c) 簡潔をきせ.
　(d) 順序よく述べよ.

というもので、人々はこれに従って会話を交わしているとメンタリスト達は考える。しかしながら、行動分析学からみれば、会話の公準に適う言語行動が強化されるという行動随伴性がそのような言語行動を制御しているのである。

さまざまな言語行動を、メンタリスティックにではなく、行動随伴性の枠組で分析することによって、言語研究はより実りあるものになるであろう。

註1) 本稿はSato (2004) および佐藤 (2004) を発展させたものである。

註2) 日本人が何を嘘と見做すかについては個人差が著しい（Sato and Sugiyama (1994), 佐藤 (1996), 廣江・佐藤 (2005)）。

引用文献

Clark, H. and Gerrig, R.（1984）. On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General,* 113: 121－126.

Grice, P.（1975）. Logic and conversation. In P. Cole and J. Morgan（Eds.）, *Syntax and semantics: Speech acts*, Vol. 3. New York, NY: Academic Press.

廣江美恵･佐藤方哉(2005)．人は何を嘘と呼ぶ―発話者自身の未来の行動への言及がある場合．*日本行動分析学会第22回年次大会発表論文集*，31．水戸：常磐大学.

橋元良明（1989）．*背理のコミュニケーション*．東京：勁草書房

Kreuz, R. and Glucksberg, S.（1989）. How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 118 374－386.

佐藤方哉（1996）．人は何をウソと考えるか．*言語*，25，（3），28－33.

Sato, M.（2004）. *A behavior analysis of irony*. Paper presented at the Second International Conference of Association for Behavior Analysis, Brazil.

佐藤方哉（2004）．歪曲タクトとしての嘘とアイロニー．*日本行動分析学会第21回年次大会発表論文集*，40．東京：帝京大学.

Sato, M., and Sugiyama, N.（1994）. “Lying”. In S. C. Hayes, L. J. Hayes, M. Sato, and K. Ono（Eds.）*Behavior analysis of language and cognition*（pp.165－180）. Reno, NV: Context Press.

Skinner, B. F.（1957）. *Verbal behavior*. New York, NY; Appleton-Century-Crofts.

Sperber, D. and Wilson, D.（1981）. Irony and the use-mention distinction. In P. Cole（Ed.）, *Radical prgamatics*. New York, NY: Academic Press.

田中茂範（1995）．発話態度の把握：皮肉と嘘．慶應義塾大学言語文化研究所紀要，27，57－92.